

大学院委員会記載欄	
開催年月日	年 月 日
決定事項等	

学 長	教務部長

2024年 2月 9日

大学院委員会議長
学長 小崎 眞 殿

文学研究科長 椎名 亮輔

博士課程（後期）修了認定の件

標記の件に関し研究科委員会において審査を行い以下の通りに決定しましたので、
合格者につき学位授与願いたく申請いたします。

記

決定年月日	2024年 2月 9日		審査数 1 名	
審査の結果	合格者 1 名	不合格者 0 名	審議未了者 0 名	
合格者氏名	9E20101 上野 裕子			
特記事項	在学年数、単位取得等に関する記事	教務課長	教 務 課	
	学費納入に関する記事	経理課長	経 理 課	

博士学位論文審査結果報告書

2024 年 2 月 7 日

学 位 申 請 者	上野 裕子
審 査 委 員	主 査 飯田 毅 
	副 査 若本 夏美 
	副 査 今井由美子 

本学大学院生上野裕子から「Changes in the Metacognitive Reading Strategies and Learning Process of Japanese University Students Before, During, and After Study Abroad」という論文名で、博士の学位申請があった。論文はA4用紙、英文で110ページの労作である。これを受けて2023年10月に文学研究科博士後期課程委員会が開催され、学位（博士）論文審査委員として、主査飯田毅、副査若本夏美、今井由美子の3名が審査に当たることになった。




最初に申請に必要な条件である査読付学術誌掲載について確認された。外国語メディア学会(LET)関西支部『LET 関西支部研究紀要』及び大学英語教育学会(JACET) 関西支部『JACET 関西支部紀要』にそれぞれ論文が掲載されており、その他にも単著の論文1本、研究ノート1本、学会発表（個人）3本、学会発表（共同）6本があり、基準を十分に満たしていることが確認された。その上で審査され、2月5日に公開の口頭試問会が開催され、各委員から忌憚のない質疑応答が展開され、上野は適切に応答した。

申請論文はStudy 1、Study 2、Study 3の3部で構成され、3年間に渡る縦断的研究であるという点で特徴的な研究である。Study 1は、先行研究で議論があった大学生の英語メタ認知読解方略と英語の読解力の関係についてまとめられている。また、英語読解力が高い学習者はテキストの内容についてもふりかえりを行っていることを明らかにした。英語の読解力とメタ認知の関係を明確にしたという点で意義のある研究である。Study 2では、留学前の2学期間で読解力は向上し、効果的な読解方略を習得し、使用していることがわかったが、その中で自己調整学習を行っている学習者はそうでない学習者よりも英語読解力の向上が顕著であることを明確に示した。リーディングの分野において読解方略と自己調整学習の有効性を示した点で優れた研究である。Study 3は留学後に実施し、留学中の学生の読解力を含めた英語学習全体に焦点を当て研究を進めている。結果として、留学後英語読解力が向上し、留学中に学生は内発的動機づけを高め、自己調整学習を促進させることがわかった。また、留学で得られた動機づけや経験が留学後の学習にも影響を与えていることも明らかにした。ただし、留学後も主体的に英語学習を継続させるためには動機づけばかりでなく、明確な目標を設定することが大切である、と指摘している。今まで留学前後の結果に焦点を当てる研究が多い中で、本論文は留学中の学生の学びを詳細に分析している点、また留学中の学生自身の自己調整学習の有効性を示している点で優れている。

以上、本博士論文は、約9ヶ月間の英語圏大学への留学を義務付けた学科に所属する女子大学生が留学前、留学中、留学後の3期に渡ってメタ認知と自己調整学習をどのように利用しながら英語学習に取り組んできたのかを研究した長期縦断的研究である。このような研究は他に見られない研究であり、定量的分析と定性的分析を適切に併用して結果を出している。審査委員全員一致で上野の申請論文に対して、博士（英語英文学）の学位を授与するに値するものと認定した。

博士學位論文内容要旨

2024 年 2 月 7 日

学位申請者	上野 裕子
審査委員	主査 飯田 毅 
	副査 若本 夏美 
	副査 今井由美子 
<p>(要旨)</p> <p>本博士論文は、4年間の履修過程の中の2年次秋学期から3年次春学期までの約9ヶ月間の英語圏大学への留学を義務付けた学科に所属する女子大学生が留学前、留学中、留学後の3期に渡ってメタ認知(metacognition)と自己調整学習(self-regulated learning)をどのように利用しながらリーディングを中心とした英語学習に取り組んできたかを研究した長期縦断的研究である。</p> <p>本研究は、Study 1、Study 2、Study 3の3部で構成されている。Study 1は、留学前のメタ認知と英語の読解力との関係についての研究である。従来の研究では読解におけるメタ認知の役割は弱いとされてきた。特に読解における方略(strategy)を明示的に教授しても読解力は向上しないとされてきた。しかし、本論の著者である上野裕子は、学習者が読解の過程の中でメタ認知をどのように使って読んでいるのかを調査してこなかったことに研究の問題点を見出し、読解の過程におけるメタ認知の役割を読解前、読解中、読解後の3段階に分け調査している。Study 1では以下の2つの研究課題が設定された。</p> <p>研究課題 1: 読解におけるメタ認知方略使用は英語の読解力に関係しているのだろうか。</p> <p>研究課題 2: 読解後の段階において大学生のメタ認知はどのように機能しているのだろうか。</p> <p>Study 2ではメタ認知を先行研究によって明確に定義した上で考察している。メタ認知を Flavell の定義に従い、メタ認知的知識とメタ認知的活動(経験)に分け、後者をモニタリング(monitring)とコントロール(control)に分けている。つまり、メタ認知的知識とは自身の読解、課題、課題解決の方略に気づくことであり、メタ認知的活動とは自身の読解を制御することである。また、メタ認知は自己調整学習において重要な機能を果たしているという先行研究に基づき、自己調整学習者を自身で計画を立て(plan)、目標を定め(set goal)、学び全体を調整し(organize)、自身で学びの全体を監視する(self-monitor)人と定義している。その中で、メタ認知は目標設定、学習全体の制御、学習の評価に関わっているとしている。その上で留学前の読解に焦点を当て、2つの研究課題を設定した。</p> <p>研究課題 3: 大学生は自身の英語の読解力を含めた読解の方法をどのように捉え(monitor)、読み方を変えるのか。</p> <p>研究課題 4: 自己調整学習におけるメタ認知は英語の読解力に関係しているのか。</p> <p>Study 3においては、留学中と留学後に焦点を当て研究を進めている。約9ヶ月の留学によって英語の4技能(リスニング、リーディング、スピーキング、ライティング)が向上することは先行研究から明らかになっている。特に、学術的読解力を除いた3技能は向上している。また、留学中と留学後では動機づけ(motivation)が変化することもわかっている。しかし、留学中に学生がどのように学んだのかという学習過程(learning process)については不明確であることから、研究課題 5, 6, 7を設定した。</p>	

研究課題 5: 留学は学生の英語の読解力を向上させ、メタ認知方略を促進させるのだろうか。

研究課題 6: 留学中の授業外英語学習に取り組むために、学生はどのように 4 技能を利用したのだろうか。

研究課題 7: 学生の英語学習における動機、行動、メタ認知プロセスは留学前と留学後ではどのように変化するのだろうか。

本研究の参加者は、Study 1 では 84 名、Study 2 では 75 名、Study 3 では 56 名である。それぞれ同じ学生を対象に 3 年間に渡って継続的に研究しているが、新型コロナウイルス感染症の蔓延のため休学して留学を延期した学生がいるために参加人数に変化が生じている。

研究方法のデータ収集及び分析に関して、Studies 1, 2, 3 において 27 項目から構成される「読解に関するメタ認知方略質問紙」を先行研究に照らし合わせて自身で作成し、使用した。Study 1 の研究課題 1 については、1 年次秋学期の最初に研究対象クラスで質問紙調査を実施し、英語力上位群と下位群との間で、メタ認知が読解前・読解中・読解後の 3 段階でどのように異なるのかを比較した。研究課題 2 では、質問紙調査で得られた読解に関するメタ認知方略を因子分析し、2 因子を抽出し、上位群と下位群との間で因子得点を比較した。研究課題 3 では、TOEFL iBT を使って 1 年次の春学期最後と秋学期最後のリーディングを含めた 4 技能の伸びを比較した。また、読みのプロセスに関する自由記述質問を尋ね、NVivo を使って文章全体から読み解く「トップダウン方式」、文レベルから読み解く「ボトムアップ方式」、「その他」に分けて分析した。研究課題 4 では、テキスト読解の方法及び語彙・文法に関する言語知識をどのように増やしたかについて参加者の中から Zimmarman の定義に従って、無作為に 17 名の学生を選び、自己調整学習者と非自己調整学習者に分けて面接を実施した。

Study 3 は留学後に実施している。研究課題 5 では、TOEIC IP を使用して留学前後の読解を含めた英語力を比較した、また「読解に関するメタ認知方略質問紙」を使って留学前と留学後の読解に関するメタ認知方略の使用について比べた。研究課題 6 では、留学中の授業外の自主的な学習が自己調整学習におけるメタ認知プロセスを機能させると考え、参加者の中から無作為に選んだ 22 名を対象として、どのように自主的な学習に取り組んだかについて面接を実施した。回答内容を「自主的学習」、「スピーキングとライティングについてのふりかえり」、「自主的学習の課題」の 3 種類のカテゴリーに分けて分析した。研究課題 7 においては、留学中の英語学習及び自己評価に関する自由記述の質問紙を実施した後で、参加者の中から無作為に選んだ 22 名を対象に留学中の教室内及び教室外学習、読解のプロセスと読解力の変化、留学による動機づけ、行為、考え方、英語学習の変化について面接を実施した。その回答をカテゴリーに分けて分析した。




研究課題 1 の結果として、高いレベルの英語読解力を持った学習者はメタ認知方略を読解前・読解中・読解後の全ての段階において利用していることがわかった。このことは読解力が高い学習者は読解においてメタ認知方略の重要性を認識し、実際に使っていることを示している。研究課題 2 の因子分析の結果、「読解教材に関するふりかえり」と「読解のプロセスに関するふりかえり」の 2 因子が抽出され、読解力が高い学習者ほど読解教材に関するふりかえりが多いことがわかった。読解力がある学習者は英語の文型、文法、語彙に関する言語知識を持っていることから内容に関してメタ認知読解方略を使って著者の意図を探るような深い読みに関わっていることが示唆される。研究課題 3 の結果から、春学期最後と秋学期最後の参加者全体の TOEFL iBT の 4 技能が伸びていることがわかったが、リーディングの効果量はそれほど高くはなかった。また、この間の読解におけるメタ認知方略使用に関しては大きな違いはなかった。しかし、学生の読解に関する自由記述を通して秋学期にはボトムアップ方式よりもトップダウン方式を利用した学習者が多くなったことが示され、学習者の読みの変化が示唆される。研究課題 4 では、自己調整学習者はそうでない学習者より TOEFL iBT のリーディングの伸びが顕著であり（効果量が高く）、インタビューの結果からも言語知識の有効性とその獲得方法を調整するメタ認知、そして言語知識を活用してどのように読みを深めていくことが大切であるかが示された。研究課題 5 に関しては、留学後の TOEIC IP のリーディングとリスニングの点数が大きく上回り、読解前・読解中・読解後のメタ認知方略使用量は留学前に比べて留学後が上回り、同様に読解力の高い学習者は低い学習者に比べてその使用量が上回った。このことは留学中のメタ認知が読解力に影響を与えていることを示唆している。研究課題 6 の結果、自主的学習に取り組

んだ学生は、特にスピーキングやライティングの産出技能に力を入れて日々の生活の中で工夫しながら学んでいることからメタ認知を働かせながら内発的動機づけを持って英語学習に取り組んでいることが読み取れる。このことは英語が日常的に使われる留学という場での学生の学習方法について示唆を与えてくれる。研究課題 7 の結果、英語学習の目標を設定すること、英語学習を楽しむこと、低い学習動機が高い学習動機に変化するという構成要素のカテゴリーである「行動と動機づけの変化」、完全な英語を話さなくても良い、というような「言語意識の変化」というカテゴリー、最後に「留学前後で変化なし」という 3 つのカテゴリーに分かれた。この結果から、学生の動機づけは留学前の TOEFL iBT で高得点を取得するという道具的動機づけから内発的動機づけ、外発的動機づけから内発的動機づけに変化していることが示唆される。

結論として、次のことが言える。Study 1 では、読解前・読解中・読解後のメタ認知読解方略は英語読解力に関わり、読解のプロセスをふりかえりによってリーディング力を高めることにつながる、と言える。Study 2 では、自己調整学習者は、教室外の自主的な英語学習を利用して、英語読解力を高めることができることがわかった。Study 3 では、学生は英語学習を通して、より効果的な方略を獲得する傾向が見られる。また、高い読解力を持つ学生は読む目的を持ち、読解前・読解中・読解後の 3 段階でメタ認知方略を活用して読んでいることがわかった。また、読解方略を自動化させる傾向が読み取れる。留学によって、学生の動機づけは外発的動機づけから内発的動機づけと変化し、英語の自己調整学習を促進させる傾向が見られる。

博士學位論文審査結果要旨

2024 年 2 月 7 日

学 位 申 請 者	上野 裕子	
審 査 委 員	主 査	飯田 毅 
	副 査	若本 夏美 
	副 査	今井由美子 
論 文 題 名		
Changes in the Metacognitive Reading Strategies and Learning Process of Japanese University Students Before, During, and After Study Abroad		
(要 旨)		
<p>上野裕子は博士課程(前期)修了後、引き続き博士課程(後期)へと進んだ。後期課程においても前期課程と同様に研究テーマを英語読解力に設定し、研究を進めて来た。上野は本学の英語英文学科を卒業後一般企業に就職したが、その後卒業時の希望であった教職を志した。彼女は公立小学校の講師、公立中学校の教諭の経験を有する。中学校での英語指導の経験から生徒の読解力の弱さに注目し、その原因と改善方法をテーマとして取り上げ、今日まで研究に取り組んできた。</p> <p>本博士論文は、日本人大学生が英語圏の大学への留学という学習環境の変化の中で、英語の読解力を中心とした英語技能は留学前から留学後までどのように変化するのかというテーマをメタ認知、自己調整学習という観点から同じ学生を対象に3年間に渡って研究した長期縦断的研究であり、他にあまり見られない研究である。</p> <p>先行研究から、英語の読解においては英語の文法力、構文力、語彙力の言語知識(linguistic knowledge)が読解力に密接に関係していることは知られていた。しかし、単に言語知識を増やせば、英語読解力が向上するわけではない。また、先行研究の中で、英語の読解方略を明示的に教えることで読解力を伸ばそうとする研究もあったが、結果として読解力は伸びることはなかった。そこで、上野は読解力と言語知識の間にメタ認知が働いていることに注目し、読解力の高い学習者とそうでない学習者に対して質問紙を使用して比較することで、読解力のある学習者はテキストの内容までふりかえっていることを明らかにした。このことは読解力とメタ認知の関係を示唆する重要なポイントである。</p> <p>次に、上野は読解におけるメタ認知の役割だけでなく、メタ認知が重要な役割を果たす自己調整学習という概念を取り入れながら、研究を進めてきた。特に、留学前の半年間の読解方略の指導により、英語読解力が統計的に有意に伸びたことを明らかにしているが、その伸びの効果量が小さいことを指摘し、自己調整学習を行う学習者はその効果量を大きく上回る成果を出していることを明らかにしている。</p>		

約9ヶ月という2セメスターの留学が英語力にどのような影響を及ぼすかについては、先行研究によって、産出的技能(スピーキング, ライティング)ばかりでなく受容的スキル(リスニング, リーディング)も伸びることが明らかにされている。ある意味当然かもしれない。しかし、その当然なことを面接法によって詳細に分析し、原因を追究した研究はなかった。上野は、この分析によって単に留学したというだけで英語力が向上するのではないことを明らかにしている。英語読解力の向上には留学だけが関係しているのではなく、メタ認知を含めた留学前からの継続的な学習の積み重ねが寄与しているのである。更に、全ての留学をした学生が自己調整学習者ではなく、留学中に明確な目標や動機づけを持ち、主体的に考え、工夫して学ぶ学生は英語力を向上させるだけでなく、留学後も継続的に学ぶ学生であった。このように一見当然と思われる点に焦点を当て、その原因を探っている点も本論文の特徴であると言える。

最後に、本研究は3年という長期に渡るデータ収集をもとにした論文であり、新型コロナウイルス感染症という事態に遭遇しても適切に対処し、研究を続けることができた。本論文の完成に至るまでの研究計画・実施は高く評価される。同時に、探索的因子分析や t -検定などの多用な統計的手法の活用及び効果量の算出など手法の正確性も評価される。

以上により、審査員全員一致で本論文を博士論文に値するものであると認定する。

試問結果の要旨

2024 年 2 月 7 日

学 位 申 請 者	上野 裕子	
審 査 委 員	主 査	飯田 毅 
	副 査	若本 夏美 
	副 査	今井由美子 
<p>(要 旨)</p> <p>本学博士課程（後期）3 年次の上野裕子から 2023 年 9 月に博士の学位申請があった。論文名は「Changes in the Metacognitive Reading Strategies and Learning Process of Japanese University Students Before, During, and After Study Abroad」である。2023 年 10 月に文学研究科博士後期課程委員会が開催され、学位（博士）論文審査委員として、主査飯田毅、副査若本夏美、今井由美子の 3 名が決定され、厳正な審査に当たった。</p> <p>各委員には事前に申請論文の複写物が渡され、各委員は余裕を持って論文を審査し、口頭試問の数日前に会議を開き、当日の進行及び内容に関する事前打ち合わせを行った。2024 年 2 月 5 日本学にて公開の口頭試問会が開催された。若本による開会宣言の後、最初に申請者から約 10 分の概要発表があり、次に各委員から申請者に対して論文内容に関する質問がなされた。質問は章ごとに各委員から順番に出された。主な質問項目は、論文で使用されている用語（metacognition, metacognitive process, style 等）の意味・理解・使用について、留学が一つのテーマであるのになぜ敢えてリーディングを取り上げたのかという理由、本論で使用されている selective attention と skimming と scanning の関係、論文で取り上げた動機づけ(motivation)の種類、新型コロナウイルス感染症により研究に影響を受けた事柄、留学中の学生のリーディングの量と種類、学生がリーディングに苦手意識を持つ理由に関する本文の説明の仕方、メタ認知・言語知識・読解力の関係、リーディング指導・自主的な英語学習・自己調整学習の関係、留学なしでリーディング力を向上させるための指導のあり方、Conclusion のまとめ方であった。各委員から忌憚のない専門的な質問が出され、上野は一つ一つ丁寧にかつ適切に応答した。続いて、上野から論文及び口頭試問についてのコメント、主査のコメント、若本の閉会宣言にて終了した。</p> <p>本博士論文は、大学生が留学前、留学中、留学後の 3 期に渡ってメタ認知と自己調整学習をどのように利用しながらリーディングを含めた英語学習に取り組んできたのかを研究した長期縦断的研究である。この種の研究は研究全体を構想する力と根気が必要であり、研究参加者に対して丁寧な対応が求められる。上野は質問紙法と面接法を巧みに利用して、定性的分析と定量的分析を適切に併用して結果をまとめている。加えて、約 70 分の口頭試問を通して、申請者の応用言語学に関する知識と論理的な説明力を持っていることが確認できた。審査委員全員一致で上野の申請論文に対して、博士（英語英文学）の学位を授与するに値するものであると決定した。</p>		